

水曜祈禱会 バイブルスタディー & 祈りの課題

エペソ教会へのパウロの手紙

水曜祈禱会

エペソ教会へのパウロの手紙

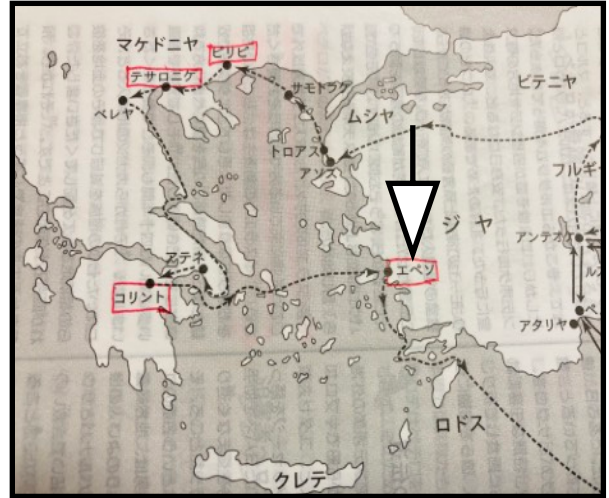
「エペソ教会へのパウロの手紙」のポイント

1 エペソ教会への手紙の概要

誰が パウロがエペソ教会の人々へ

何を エペソ教会に何か問題があった為に書かれたという手紙というよりは、パウロがエペソ教会を愛し、記した手紙です。核心的なテーマは「一致」です。創造主を知ることや、生き方についても一つとなるように勧めました。

いつ A.D60年頃とされています。パウロが第3回宣教旅行後に捉えられ、61～63年、ローマの獄中で書いたとされています。獄中書簡(ピリピ、コロサイ、ピレモン、エペソ)のうちの一巻。



2 エペソ教会への手紙のアウトライン

創造主の計画	1:1~14	挨拶 (序文)
	1:15~3:21	創造主がなして下さる御業
聖徒の生き方	4:1~32	新しい生き方
	5:1~6:9	創造主の為に生きるという事
霊的な戦い	6:10~20	主が与える武具
	6:21~24	挨拶 (結び)

3 評価など

エペソ教会への手紙は「パウロの思想の真髄」「キリスト教信仰について、最も権威のある説明書」とも評価されています。

「エペソ教会へのパウロの手紙」を読んでみよう

1 ■今日の聖書箇所：4章25～32節 ■タイトル：

犯罪を犯した犯人が、裁判で刑を減刑される場合があります。それは本人に反省した姿があるかどうかです。逆に反省した姿がない場合には、裁判で減刑されることはありません。では、どうやってその人が反省したのか、判断できるのでしょうか。それは行動や言葉に現れてきます。同じようにパウロは新しい人になったのなら、具体的な言動で現れると語りました。

(1)新しい人の言葉(25, 29節)

パウロは、まず新しく変えられた人は言葉に変化が現れると語っています。25節では「偽りと言うことをやめ、真実を語ること」だと語りました。その後には「私たちはお互いにキリストの体である教会員同士なのだから」と語り、(社会生活でももちろんそうですが)教会共同体の中で偽りを語らずに真実を語ることを求めました。この世界は偽りに満ちています。偽りで自分を飾ろうとしている人々がいます。しかし、イエス様に出会い、新しく変えられた者として偽りではなく真実を語る新しい姿が求められるのです。1日、もしくは1週間、教会や社会で真実だけを語ろうとしてみてください、簡単な事ではありません。しかし、その真実を語る葛藤の前でイエス様の事を思い出し、聖霊様に助けを祈ることで信仰はさらに深まっていきます。

また29節には「他人を傷つける言葉を言わないように(新改訳:悪い言葉)」という事が書かれています。そして逆に「聞く人の益になるように」とパウロは勧めました。他人を傷つける言葉(悪い言葉)とは、邪悪な言葉や歪んだ意図を持って話す言葉です。またその言葉によって悪い結果をもたらそうとする言葉を意味しています。教会の中で、相手を傷つけ、相手が悪い結果を被るような気持ちで発する言葉の事です。では、聞く人の益になる言葉とは一体どんな言葉でしょうか。他の聖書では「徳を養う」という言葉が用いられていますが、建設に用いられる言葉で「建てる(for building)」という意味が込められています。つまり、自分の言葉を通して、相手を励まし、建て上げる為に自分の言葉を用いなさいという事です。言葉一つで相手が励まされ、傷つく時代です。ただ単に言葉を発するだけでなく、相手にどのような影響を与えているのかもフィードバックしていきたいものです。

(2)新しい人の感情(26~28節)

26節では「たとえ怒ったとしても、罪を犯してはいけない。また激怒したまま、いつまでもそうした状態でいてはいけない」と感情の表現についてもパウロは言及しています。人間は、救いを得たとしても、古い人間の姿は完全に無くなってはいないので、怒りを覚えることはあります。しかし、ここでパウロが語ろうとしているのは、その怒りをどのようにコントロールするかが問われると語っているのです。新改訳では「日が暮れるまで怒ってはいけない」と語りました。なぜなら、怒りを覚えたままいると、怒りは憎しみや恨みを生み出し、憎しみや恨みは人を傷つける言葉や人を傷つける行動へと移り、罪を生み出すからです。ですから、怒りをコントロールせず放ったらかしにするのは、悪魔につけこむ隙を与える(27節)と語っているのです。

28節では「盗みをしていた者は」という言葉が記録されています。当時のエペソ教会の中には、自ら働いて報酬を得て生活を立てるのではなく、不正な方法で生活をしてきた人が居たようです。ただ報酬を得るのではなく、貧しい人や困った人を助ける事ができるように正当な仕事をし報酬を得るようにと語っています。新しく生まれ変わった人の労働の目的な自分の為だけではなく、他をも生かす為に用いるべきだという事です。

(3)聖霊様を悲しませない為に(30~32節)

最後にパウロは、31節で、無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりを悪意と共に一切捨ててしまいなさい」と語りました。その目的は聖霊様を悲しませない為です。新しい人の生き方は、結局のところ、聖霊様を悲しませないように生きていく言動があるかで示されます。私たちのうちに内住されておられる聖霊様を意識し、聖霊様を喜ばせる生活をするときに、新しい人の生活が満たされていきます。

2 分かち合ってみましょう

パウロは新しい人の生活は具体的な言動に現れてくると、この箇所では話しています。もちろん完璧な人間はいませんので、全ての言動が完璧な人などいません。しかし、私たちの日々の言動を見ながら、聖霊様を悲しませていると思うところがあるのなら、改善していかなければなりません。しかし、聖書では自分一人でそれを改善しなさいとは語っていません。内住してくださっている聖霊様によって変えて頂かなければなりません。私たちはどのような部分に変化がある時、聖霊様を喜ばせる生活ができるでしょうか。